

學界展望

本質理論と純粹理論

——二つの均衡思想の交渉について——

大熊 信 行

現存するものの理解ある發展よりも根本的な新建設をよろこぶのは、わが經濟學の領域における一種の氣風である。この狀況は屢々指摘され、この氣風がよつて生ずる事情もくりかへし反省されてゐるにかかはらず、事態は改善されるところはみえない。たとへば、數理經濟學または純粹經濟學についていへば、われわれの信するところではその目的も、方法も、そして到達した諸結果も、それ自體としてなら排斥すべきものはないにかかはらず、學界には根本的にこれに對立しようとする諸傾向がある。

交換價値は一つの評價されうる大いさである。およそこの種の大いさの研究を目的とするのが數學であるとするれば、數學者は交換價値の理論といふべき『數學の一分科』を忘れてゐたのだといふワルラスの言葉はすこしも人を驚かす

ものではない。純粹經濟學すなはち交換の理論が力學や水力學のやうに物理數學的科學であるとしたら、これに數學的方法と用語とをもちゐるのに、なんの躊躇すべき理由もない。それは科學上の一発見であると同時に、まさに一箇の科學の発見である。社會科學の範圍から精密な取扱ひをゆるすところの極めて狹隘な領域をえらみ、精密科學の方法をこれに適用するといふ態度は、この発見の自覺にもとづいてゐる。基礎の明確さと問題解決の方法の確實さがその努力の目標であり、そしてこの努力は既存の精密諸科學にたいする『羨望』に燃え、それらの諸科學の領内に參入しようとの熱望によつて力づけられたのである。それは多くの精密科學者を支配した科學精神と同一の精神であり、さらにこの精神は新しい問題や領域の発見が歴史的な當初において伴ふのをつねとする美しい感奮によつて輝きをそへた。シュムペーターの處女作はそれである。この著作にあらはれた高邁な科學精神は、年少の研究者が一度はそれを通過することによつて鍛へられなければならぬ鑛爐であるが、しかし人はこの著作の反面を流れてゐる寛宏の精神をみがささないであらう。それは一箇の精密體系に自己を限定し、そして至り盡した基礎のうへに安んずるもの謙虛から來てゐるかとおもはれる。それは精密科學以外の領域にも諸問題が存在することの是認と、しかしそれらを取扱ふことの斷念としてあらはれ、なかなづく一切の黨派的態度の否定としてあらはれる。そしてまた一つの精密體系の樹立のために必要ならざる思辨の一切から絶縁することと、科學の本體をもたない方法論的態度を排斥することとの二つにおいては峻嚴であると同時に、精密體系そのもの出發點が一つの假設であることと、その假設は恣意的なものであることを明かにする。が、この最後の點は純粹經濟學の特質ではもちろんなくて、精密科學一般の特質をかたるにすぎぬ。——「一つの明確な精密體系、人間を對象とする科學領域においてこれまで存在する唯一の精密體系

系」がそのやうにして生れたといふことに對抗的態度を挟むべき正當な理由はどこにもない。たゞそれは『經濟學』の名を排他的に占取すべき體系ではないといふにすぎない。われわれはさう考へるものである。しかも經濟學のだから考へても最も本質的な部分だとおもはれる傳統的な理論とその課題とを繼承し發展せしめてゐる學者が現代ではこの研究分野から輩出してゐるといふ事實をかへりみると、純粹經濟學を排除してその地位に交代すべき他の經濟學が生れなければならぬといふ見解は、總じて輕卒でないとするれば性急に失するものといはなければならぬであらう。にもかかはらず純粹理論は根本的な批評と對抗とを伴つてゐる。しかし科學の新建設を歌つてゐる今日一切の論議が、相互の觀念、態度、方法のあらゆる相異にもかかはらず、期せずして純粹經濟學への對立と批評とをもつてその出發點としてゐるといふ事實は、それらの論議の性質が何であるかは明かでなくとも、純粹經濟學がすでに何であるかを明かに語るものといふべきであらう、それは現代における經濟學の正統にほかならぬといふことである。この事實の確認が必要であり、あらゆる新建設は對抗よりもまづ確認から出發しなければならぬ。すくなくともこれはわれわれの出發點である。

いかなる科學上の體系も批評をまぬかれるものではない。精密科學には屬しない哲學や國家論のごときはいふまでもないとして、論理學のやうな領域ですら原理論争において一致點に到達せず、箇々の問題ではなく全方向全體系の運命が根本から賭されてゐることを指摘したのはシムペーター自身である。化學においても力學においても事態が根本からちがつてゐるのでなく、原理論争があらゆる科學の特質であつて經濟學だけの遺産ではないといひ、そして『およそあらゆる體系はつねに新らしいそれに交代せねばならぬ』といふ。むしろまたそこに發展能力の徴候を見

るべしといふ。古典的體系の崩壊と純粹理論の生誕について語られたこれらの言葉は、おのづからまた後者の運命についての預言をふくむものかもしれぬ。自然は飛躍せずといふマーシャルに叛いてかれはいつた、——「力づよい跳躍と沈滞の時期と、あふれるばかりの希望と苦々しい幻滅とが交代し、たとへ新らしきものは古きものに根差してゐる」とも、發展は決して連続的ではない。われわれの科學は如實にこれを示す」と。すなはち科學の發展は屢々「飛躍的』であるといふのであつて、われわれはむしろ科學の將來のためにこの言葉を忘れないであらう。しかしまたおなじ人はいふ、——新らしい學派は独自の立場に立つことを努め、古い研究との關聯の要求を烈しく斥けるが、しかしなほかかる關聯は存在すると。すなはち新らしい體系が古い體系なくしては發生しないものであることの、つまり有機的發展の靜かな歩みは妨げられてゐないといふ側面の強調をも忘れてゐないのである。門外者の眼には確實と一致そのもののやうに見える精密自然科学においてさへ基礎見解の全部が争はれ、理論建築の根本が揺りうごかされてゐることをかれが指摘してゐるのも、科學にたいする統一的な發展の希望を棄させるためではない。むしろかれの著作は全體としてその希望に輝いてゐることを否定することができぬ。それは天才の獨創的な業績のみがもつ最初の新鮮な迫力をそのまま繼承し、それを維持しながら、より大きな展望のうへに新らしい統一をめざしてゐるのであつて、すでに純粹經濟學が科學の正統たるべき運命を荷なつたものと見ないわけにゆかぬ。われわれはさう見るのである。これはすでに現代の正統派である。必要な態度は第一に、この直系に屬する人々が學派の方法を擁護するにとどまらず、あくまで潔癖にしかも積極的にその方法を支持し、時代の新要求にたいしてはその方法の價値をみづから吟味しつつ、そして可能なる最後の限界にいたるまで體系化の發展を斷念しないといふことである。われわれは中山博士において

全體の印象としてその典型を見いだす²⁾。第二に必要な態度は、この學派との關係において事實上他の立場にをる人々に關するものであるが、この學派の正系的發展にたいして慎重な期待の態度を棄てないといふことである。それは表面的な禮儀のためではなく、眞に科學研究の何たるかを知つたものが絶対に執らざるを得ない唯一の態度であらう。およそ科學者はきはめて偶然にして外部的な、屢々個人的にして相對的な、複雑にして非科學的な機縁によつて或研究に従事し、あるひは研究上の一つの立場をとつて來てゐるといふのがむしろ通例の事實であることは他の場所で指摘したところであるが、戒めなければならぬものはそのやうな事情を基にして生ずる一切の偏見である。われわれは純粹經濟學がその方法の自己制約による結果としてあらゆる要求に應へうるものとは初めから考へてゐない。その意味においてわれわれは常に無遠慮な『批評家』である。殊に事實に添うべき體系としての價値については、評價の動搖は一層免れえない運命が將來に待つてゐるのではないかといふ懸念さへ包むにおよばないと考へる。しかしながらこの科學が現に自己の課題として設定してゐる重要な諸問題にたいして、なんらの解決をも解答をも別に用意せざる人々が、他の問題を提起することによつて一つの學派を樹立しようと信じ、のみならずそれをもつてこれに對抗しあるひは代位しうるかのごとく主張するのを見ては到底疑念なきを得ないのである。ゴットルまたはゴットル派の人々に見いだされる批評の態度は、純粹經濟學をもつて方法のみならず目的において誤つたものと主張するのであり、原理論争はすでに對象問題にまでおよんでゐるのである。われわれはしかしゴットル派の批評を目して、純粹理論にたいして示されたあらゆる不滿のうちの最大の表現であることを疑はぬ。それは精密科學の王國へ朝すべき必要上、方法論的に委棄されざるをえなかつた重要な基本事實にむかつて新たに集中された關心の反面であり、またそれらの

基本事實は他の學問的方法によつて別に體系化されなければならぬといふ決意およびその遂行によつて力づけられたものといふべきであらう。⁽³⁾もしこれをもつて純粹經濟學にたいするあらゆる抗議の系列における極限に立つものとするならば、他の多くの抗議は、それぞれ程度の差において、『純經濟的』なるものに終始する精密體系にたいして社會學的または歴史的なるものの優位を主張するものであり、そしてそれらは他ならぬドイツ經濟學の傳統的立場を語るものだといふことになるのであらう。ゴットルの立場がドイツ經濟學における現代の頂巔であることをおもひあはすべきである。⁽⁴⁾

純粹經濟學にたいする批評の様相はもろんこれに盡きない。むしろ政治經濟學への變容の要求をもつて最近における批評の一特徴であるといふこともできるであらう。われわれは武村忠雄教授においてもその顯著な一例を見ることができ⁽⁵⁾る。純粹理論の正統を護らうとする人々は、これらの要求をいかに考へ、またいかなる方向に自己發展の道を切り拓くであらうか、これらの問題の解決は多く今日以後に屬するものといふべきである。純粹理論にたいする批判者たちの立場もまた區々であり、そしてそれぞれ自己の體系を語り、あるひは新たに語りいようとするものがあるが、その方法および出發點における純粹理論との距離もまた決して一様ではない。ただそれらに相通じるものが經濟體制の根本的な變革に應へようとする意圖であるといふことは明白な事實であり、したがつて新體系への意圖の根源をなすものが屢々それらの學者の政治思想より來る衝迫であるといふことも、看却すべからざるところである。あるひは新體系への要求の熾烈な人々ほど、なんらかの意味において『革新』思想を抱懷する人々であり、その逆は逆であることさへ、時には妄斷ではないかもしれぬ。しかし注意すべきは純粹經濟學もまたそれ自體として生長を

遂げつつあり、そして右にいふ新しい時代の意圖を委棄するほど寡慾な態度をとるものではないといふことである。靜態論的な經濟純理の反省並びに理論と政策との新たな統一への努力、したがつて經濟發展の過程に關する客觀的情況分析の武器をさぐるとともに、事實の論理の側面に『主體の論理』を把握しようとする杉本榮一教授の企てのときは、その最も注目すべき一例としてあげられるであらう。それは純粹經濟學にたいする内在的にして根本的な批判であると同時に、まさしく純粹經濟學の自己擴充に屬するものだといふことができる。この立場は、科學的傳統の圏外から政策一般の構造を示すにとどまる一部の『政治經濟學』者にたいしては純粹理論の側に立ち、しかし靜態經濟學が『主體の論理』を缺くことを非難する點においてはむしろ前者と一致するものとみづからいふ。『經濟學の傳統の圏内に身をおきながら、客觀的情況分析の論理を改訂することによつて、主體の論理の確立を目ざす』と語る言葉がその立場を要約する。われわれは事實の論理が『主體の論理』に改訂されるといふ教授の學說の内容に立入ることはいまはできないのであるが、しかしここに『主體の論理』と稱せられるものが、これを政治經濟學の構想における基本的な國家政策の論理から見れば、むしろ簡別的な、政策實施の純技術的な方式を意味するものであることを知らなければならぬ。(およそ政策なるものがこの意味における技術の過程を離れて實踐を見ることのある以上、ここに技術的といふ用語の響に毫末もこれを輕んずる氣配があつてならぬはいふまでもない。)しかし注意に値するのは、ここに『主體』とは國家のみならず、あはせて純粹經濟學にはゆる『經濟主體』一般の意味であり、したがつて企業經營の主體をも家政經營の主體をも同時に包括するといふこと、——そしてなほこれらの『主體』が内包する國民經濟的な意味については何事も語られてゐないほど、それほどに抽象的な概念にとどまるといふことであ

る。この最後の一事こそは純粹經濟學の方法を根本から特徴づけるものであり、そしておそらくこの特徴こそは經濟純理をして經濟純理たるにとどまらしめるところの最後の制約を語るものであらう。純粹經濟學がすでに『主體の論理』を説くといふことは一つの變容であるが、しかし今日において政治經濟學もしくは國民經濟學の復興を欲求するものからこれを見れば、おそらく双方の圖式は依然として距離の乏しいものといはざるをえまい。その事情の一つは右の制約に根ざすのである。政治經濟學の主題の一つは何であるか？ おもふに純粹理論では單に『經濟主體』の名による高度の抽象的限定において、一括的に輕微な取扱ひしか受けなかつた各種の基本事實を、相互對照的に類別すると同時に、それらを一箇の階層的な全體關聯と內面的結合とにおいて體系化するにあるといふべきではあるまいか？ 純粹經濟學と政治經濟學との距離は種々なる角度から考察されるであらうが、しかし讀者にしてみれば兩派の垂直的な距離を想像すべき角度を欲するならば、その一つはまさにこのやうな切點にあることを知るべきではあるまいか？ すなはち『經濟主體』をもつて財量理論の周邊となす立場にあるものは、他方の科學が何よりもまづその『主體』の構成分析を任とするものであることを承認すべきであり、後者の立場にあるものはまたそれらの主體構成の分析が前者の手にある經濟量關係における全體性の側面を委棄すべきでないことを承認すべしといふに歸するであらう。しからば政治經濟學の新たな主題の一つは、主體構成の分析において得られたところの新たな意味關聯の論理をもつて財量關係全般を貫徹するにある。

われわれはしかし二つの『學派』の綜合の意圖についてはまだ何ごとをも語らうとするものではない。今日以後の經濟學が、なんらかの部分的な改修や、接合や、折衷主義的調和論の方法によつて生成するものとは考へられないの

である。一般に經濟的構造の變局に臨んで、これに應急的適應の處置をとることは既成の科學の當然の任務とすべきところであるが、しかし全體としての歴史的發展にたいするわれわれの見透しからいへば、今日以後の經濟學的發展は、いますこし歴史的精神の深所から衝迫をもつて盛りあがる思想によつてその根幹を培はれるものでなくてはならぬ。それはむしろ既成の諸學説を自己の内部に溶解するところの、したがつておそらく若干の異質物を同質化するところの一定の方法をも質すものでなくてはならぬであらう。やや突きつめていへば、われわれの期待にかぶ經濟學の性格なるものは、いはゆる『時代の要求』に應ずるといふ程度の、事物の進行に迫ひすがつてゆく體系ではなくて、『時代』そのものが何であるかを、その歴史的な未來へのかかはりにおいて、したがつて若干豫言的に全幅的に啓示するところのものでなければならず、あたかもアダム・スミスやカール・マルクスの體系が過去二世紀のそれぞれの時代においてさうであつたごとくに、まさに新たにそのやうであれと念するのである。すなはちわれわれがこのやうに世紀の課題を想定することに大膽であるといふことは、他の反面において觸自の内外學界の情況については一般に無制限の評価をつつしむことを意味するのみならず、またみづから揣らざる課題を自己に加へることを戒めるものでなければならぬ。歴史學派ないし政治經濟學的立場と、純粹經濟學との一つの對照が『經濟主體』の概念規定を境界として見いだされるといふわれわれの着眼のごときも、この着眼の意義を重視する理由は直ちに述べるごとくであるが、しかしまだそれが體系的綜合の發足點を告げるであらうと主張するわけではない。われわれはむしろ今日における問題の興味が純粹經濟學の動態論的發展の方向に集中するのを見、『政治經濟學』の名においてこれに對立する人々へ、その一部の學者は主として問題を經濟量關係の考察に限定するものであるのに徴し、總じてこれらの動向が

交換關係の均衡分析をもつて方法論上の出發點とするものを考へ、この情況にたいして特別の考察を拂はざるをえない。具體的な、當面的な問題の中心方向を語るといふ意味において、この動向は何よりも必然的であるが、しかしそれがもし同時に明日の新體系を豫感せしめるところの體系的創造の第一歩でもあるとの主張を伴ふものであるならば、われわれはこの主張に追隨することを多少躊躇しなければならぬやうにおもふからである。この點は最も重要な部分——しかし極めて主觀的に凝結した意見としてよりほかにまだ述べやうのない部分であり、まさに「在るべき經濟學」の性格と輪廓とを秘かに恣意的にゑがくものといふ批評をも辭しがたいのであるが、しかししばらくこれを個人的な欲求の披瀝としてとどめてもよい。いな、今日わが學界に澎湃たる『國民經濟學』建設の聲を一時の空雷として聽きながすことなく、聲そのものではなしにむしろその聲の中から生れてくるものあるべきことを信じようとするわれわれにとつて、それらの欲求の根ざすところと目ざすところとを共に考へることは、すでにそれ自體が一箇の學問的課題たらざるをえないのである。たとひ經濟學がその歴史上の各時代において何であつたと説かれ、また實際何であつたにせよ、それがつねに時代の思想であり、そしてそののみならず國民の生活意識を組織するところの思想であつたといふ一事は屢々忘失され、そしていまやまた想起されなければならない一事ではないかとおもはれる。國民經濟學または『日本經濟學』への近時の動向は、何よりもまづ一般にこれを思想の復活と解すべきであり、さう解さなくては理解しがたい現象であり、この動向が國民の生活意識を再組織しようとの意圖によつて貫かれてゐる事實はこれを看過してはならぬ。が、純粹經濟學のみひとり科學であつて思想ではないといふのではない。これもまたその作用において一つの思想であり、その性質の狹隘なることによつて特に一定の作用を入々の精神に及ぼし

つつあつたものだとか考へられていいであらう。この科學にたいする現代の諸批判がどういふ外形を呈してゐるとも、それらの背後を貫くものに思想の缺乏への無意識の不满があるといふことは疑のないところである。しかも純粹經濟學にたいするわれわれの根本見解はすでに述べる通りであり、これを排除してその位置に交代しようとするあらゆる試みにたいしては、われわれはつねにこの學派の擁護者でなければならぬと考へる。この態度は一學派の亞流たるに甘んずるものとの批評をしばらく免れないであらう。しかしこのことはやむをえない。この意味における一つの立場を棄てるといふことはすべての足場を棄てることである。われわれは窮竟的に純粹經濟學の側に立たねばならぬ。しかもこの側において現代の問題を考へなければならぬ。それは何よりもまづ思想への欲求を考へるといふことである。すなはち突きつめていへば政治經濟學建設の問題をば純粹經濟學の彼岸の問題であるとする従來の見解を一擲することであり、これを改めて自己内面的な問題として取上げなければならぬといふことである。しかし、それは純粹理論の構造にたいして、なんらか他の哲學や思想の體系を代置するのではない。却てその構造を貫いて、あるひはその構造の基底を掘り起して、あらゆる思想や觀念を内面から組織するところの方法の問題を考へることではなければならぬ。もしこのやうな問題提起がゆるされるならば、その方向は今日の理論の動向とは全く逆に、純粹經濟學の發足點に遡行しなければならぬものであり、その發足點の再吟味こそ、新しい仕事への着手を告げるものとなるのである。この仕事は一つの新しい方向であり、まづもつてそのやうな方向の確かな設定が今日において必要であるとおもはれる。經濟量の全體關聯または交換關係の均衡分析をもつて方法論上の出發點とする今日の理論が、現に到達したところの實りある多くの研究や、これに伴うて發展しつつある内部的な論争の諸結果にたいしてわれわれが高い

關心をもつことは、依然としてかはることはない。これはいふまでもない。なぜといつて、そのみが今日の科學の眞に堅牢にして成熟せる部分だからである。われわれがそれらの理論の發足點の吟味に立ちかへるといふのは、この場合において決してそれらの成果を疑ふことではない。いま、われわれこそ、きはめて危険な、見透しの疑はしい體系問題に手を觸れるものであり、政治經濟學の建設をもつて純粹經濟學の内面的な問題と解することにおいて、これまでの同問題に關する他のすべての論者と對立するのみならず、おそらく純粹理論そのものの立場からの強い抗議をも、第一に覺悟しなければならぬものに見えるかもしれない。われわれはしかし科學の發展が時として顯著な段階をもつことを、『たとへ新らしきものは古きものに根差してゐようとも、發展は決して連續的ではない』ことを、自他ともに想起すべき時機もまたあるといふ事を指摘していいであらう。しからば純粹理論の發足點に還るとは何を意味するのであるか？ いふまでもなくそれは交換均衡論の方法にたいする反省を意味するのであり、ただに純粹經濟學のみといはず、一般に『經濟理論』の名によつて包括されるところの近代の價值價格論の、すべての基礎および一般にその基礎を構成するものと信じられてゐる若干の基本命題の全般的な再吟味を意味するのである。

われわれはすでに今日までの政治經濟學の事實上の主題の一つとして、經濟の主體構成に關する一般理論をあげた。それは本質的に歴史的理論でなければならぬが、またおそらく國民思想との不可分の結縁をもたざるをえない。それは國民經濟の形成を一箇の階層的な全體關聯と内面的結合とにおいて體系化するところの理論でなければならぬ。この理論の特質はそれがまさに一義的に意味關聯の理論であるといふことである。われわれはかかる構成理論の根柢にもまた、それ以前の、さらにその基礎を形づくるところの、若干の基本命題が横はつてゐることを看過してはなら

ないであらう。おもふにそれは秩序としての經濟の全體的な意味關係の論理であり、經濟生活の根本構造の圖式である。しかるに財量關係の均衡科學たる純粹經濟學が、これもまたその體系以前の基礎的敘述とするところの若干の基
 本命題は、右にいふ主體構成の理論におけるそれと事實上無關係のものではなく、また理論上相容れざるものでもない。この着眼はわれわれの問題にとつて特に重要なものの一つである。純粹經濟學と政治經濟學との距離は種々なる
 角度から考察されるのであるが、一方は經濟主體をもつて財量理論の周邊となす立場であり、他方は經濟主體の構成
 分析ないし階層理論をもつて中心とする主張であること、すなはち經濟主體の概念規定を境界として二つの學派を對
 照すべき一つの角度が見いだされることはすでに一言した。およそ『主體の論理』といふ言葉にしてなんらかの意味
 を有するかぎり、その論理は何よりもまづここにいふ經濟生活の根本構造のなかにこそ見いだされなければならない
 ものではないだらうか？ いはゆる客觀的過程の論理が『主體の論理』に改訂されなければならないといふ杉本教授の
 主張は、これを理論と政策との統一の動向を語るものとして見れば、まさにその先驅たる輝きを帯びたものであるが、
 しかし遙かに退いて、この統一への欲求を、一層根本的な意味における體系問題として自己に課してみようといふな
 らば、われわれは『主體の論理』の原型的考察を科學以前のものとして委棄することはできないのである。經濟は主
 體のみに即するのではなく、客體のみに即するものでもない。經濟主體の考察を中心とする構成理論が、その基本點に
 おいて經濟の論理的構造を問はなければならなかつたのは必然であり、經濟量關係の考察を中心とする均衡理論が、
 おなじくその發端において經濟の論理的構造に關する數言を述べなければならなかつたのも不可避的である。兩派は
 ただおのおのの體系構成にとつて必要にして十分と信じられるそれぞれの範圍および程度においてこれを行つた。そ

してこれを比較的根本的な仕方で行つたものはワルラスまたはシュムペーターの系統ではなくて、すべての人の認めるごとくゴットル及びその祖述者である。秩序としての經濟の全體的な意味關聯の論理は、技術を廣義の經濟から單離することによつて、曾てない水準に到達した。狹義の經濟をもつて統轄者となし、技術をもつて限定者とする生活の論理的構造をしばらく名づけて經濟構造の論理と呼ぶならば、この論理こそは主體と客體との統一を語るべき論理の前提であり、理論と政策との統一を約束するところの體系的原理の前提でもあらう。が、しかし原理そのものではない。それは何よりもまづ生活における意味關聯を追跡する精神によつて充たされた論理だといふことができる。構成體の理論は事實かかる性質の論理によつて貫かれ、そして體系化されたものにほかならぬのであるが、しかしこの學派は財貨量における全體關聯の側面的研究にたいしては驚くべき見解をとり、これをもつてあたかも經濟學の目的以外に屬するものであるかのごとく説く。注意せよ、この根本的に謬れる見解は決して單に批評的態度のなかにのみあるのではなく、それは右にいふ經濟構造の論理において、すでに大いなる缺陷として印刻されたものだといふことを。經濟が技術にたいして課題を與へるといふ一般關係は、それが同時に一定の經濟量をも與へるといふ一般關係でなければならず、したがつて課題の附與と資力の附與とは分離すべからざる一事であるにかかはらず、構成理論は一般に事物の一面を看却したのである。經濟の秩序としての全體性または一環性なるものはむしろ總量としての經濟量の存在の規定によつてのみ證明されるのであつて、經濟と技術との領域を貫徹する論理は事實において經濟量の論理以外の何ものでもありえないことを知らなければならぬ。——たとへば節約である。節約は技術の自己命法であると同時に經濟からの命法でもある。しかも經濟もまた生活の情況に應ずる自己命法としての節約原理をもち、さらに

緩急原理をもつ。技術は一定目的を達成する方法の課題であり、つねに手段選擇の形式を通過する。この形式を規定するものが最少費用原則であり、節約はこの原則にもとづく新たな選擇から生れなければならない。それは目的を放棄することなくして餘力を剩すのである。節約された經濟量は、これを論理的にいへば必ず技術領域から經濟領域に還附されなければならない。經濟は限られた一般手段すなはち經濟的總量をもつてする生活持續における諸目的の配列および選擇の課題であり、この目的選擇はとりもなほさず諸技術にたいする課題の決定および經濟的總量の合理的配分を意味する。經濟における節約は一定目的のためにするなんらかの他の目的の制限または放棄を意味し、それはつねに經濟量配分の部分的變更としてあらはれる。與へられた一つの目的を前提する手段選擇が技術の本質であるとすれば、すべての技術の統轄者としての經濟は生活諸目的の選擇者であるといふことができる。技術と經濟との意味關係におけるこの自己完了的な階層の論理は、兩者を上下に貫く經濟的總量の循環運動に關する一定の思惟を伴ふことなしに完全に理解することの不可能なものである。ゴットルにおける經濟構造の論理ほど今日あらゆる立場の學者によつて（純粹理論家によつてすら）承認されてゐるものは稀であり、またこれほど祖述者の手によつて忠實な紹介の繰りかへされてゐるものも稀である。にもかかはらず、經濟の論理をあまりにも主體に即せしめたゴットルの一面的態度は、客體としての經濟量の運動に關する法則を探究する餘地を與へないのみならず、經濟の構造における全體性が眞に何であるかを讀者に徹底せしめたものといふことはできない。構成理論においても、均衡理論においても、われわれがその體系的敘述の發端に見いだすものは、相互に通ずるところのある若干の基本命題であり、そしてそれが經濟の原型的構造を確實に示すといふ意味で勝れたものがゴットルであることは最初にいふとほりであるが、しかし

それはただ相對的な評價たるにとどまる。われわれはまづ以上の意味における經濟の原型的な構造に關する研究が科學の基礎的研究としてきはめて重要であること、この部分の取扱ひはまさに建築における礎石のそれであり、理論の建築においては殆ど地下に埋没して一般の人々から見失はれながら、しかも全建築の様相を決定するにも似てゐることをおもはざるを得ない。それは屢々經濟學の理論的操作以前に屬するものと信じられ、時には省略することさへ可能な部分とされ、そしてここ半世紀におよぶ教科書的な著作では、ただわけもなく習慣にしたがつて、「序説」または「序章」の一部として敘述されてゐる部分、内容的には、經濟本則 (The economic principle) の命題や經濟の定義 (經濟とは何か?) を中心とする部分、時には極めて空疏な論理的思辨による方法論的な取扱ひなどからまつてゐた部分である。一言にして言へば經濟學の體系構成にとつて本來死命を制する基礎的な部分であるにかかはらず、その本體が自覺されず、すべての學者の手を通過してをりながら、その意義が完全に理解されなかつた部分である。またその事情によつて、これまでの學者の手でおぼむね御座成りな仕方であしらはれた場所だといふことになる。しかるに今日における理論と政策との統一問題をもつて體系建設の問題であるとするかぎり、われわれが立ち返らねばならないのは實にこの場所であり、したがつて政治經濟學への現代の欲求が單なる國民思想、政治思想ないし國民的政治學への欲求たる程度を超えて、經濟學の統一的な理論體系への欲求を意味するものならば、それらの主唱者が一旦立ち返らねばならない場所もまたここ以外にはないといふことになるであらう。この基礎的研究は従來いふところの經濟哲學ではない。それは一面では狹義の『理論』の發端的な一部を形成しつつ、他の反面では經濟以前の世界領域に直接に深く繋がるのである。しばらく便宜のために、この研究分野を本質理論の名によつて包括するならば、本質理論

はすでに事實として一つの發展史をもつ。従來の純粹經濟學の出發點の一つ手前に伏在的に擴がつてゐる多くの重要問題のうちに、思辨的・形而上學的ではない一つの層があり、表皮にたいする眞皮のごとき形成層があり、理論の變容の問題は一度この層まで引返してくる必要がある。と、もしこのやうな問題の一般的な自覺にもとづいて理論史の反省が行はれるとすれば、その立場はまさに經濟本質論史の方法的立場でもあるであらう。本質理論と純粹理論とは互に他を妨げあふ關係にあるのではなく、あらゆる問題の理解においてとりあへず相互補足的な關係に立つといふことができる。と同時に、本質理論はその本來の地位と性質からして、純粹理論のみならず理論體系一般にたいする體系批評の立場を維持しなければならぬであらう。このことは小論が現にその立場において書かれ、そして構成體學說にたいしてすでにいかなる批評を加へたかに徴しても了解されなければならぬ。

しかしかゝる立場からの新たな問題の設定は、おそらく多くの反對を豫想しなければならぬであらう。殊に純粹理論そのものからの抗議は一見して免れがたいものに見えるであらう。なぜといつてその現在まで、動きつゝある方向はあたかもこの逆だからである。しかしこの點については豫め問題の性質をもう少し究めておくならば、無用の論議は避けられるであらう。純粹理論の發達は最も簡明な叙述にしたがへば、ケネーにおいては經濟の循環過程として、リカードにおいては自然價格の法則として、マルクスにおいては單純再生産の表式として、またワルラスにおいては一般均衡の方程式として表現されつゝ純化の過程を経たものであり、そしてその最後のものの本質は經濟諸量における相關々係の形式的叙述すなはち交換均衡の叙述であるといふに盡きる。それは問題の所與たる一定の事實のうへに成立すべき交換關係の財量的均衡を規定するものであり、一定の事實とは人口、需要、財の數量、生産方法等の、

いはゆる「經濟の興件」である。純粹理論はこのやうな意味における興件を、理論そのものから峻別する過程において、これまでの經濟學が興味の中心とした若干の論點を喪失したことを認めるのであるが、しかしこの純化の過程は理論の必然的・歴史的な方向であつたのみならず、却てその結果として一旦失はれた諸問題の解決が十分に可能となることを豫想するものだといふ。その意味するところの方向が十分論理的に構成されてをらず、現に實蹟としても一々證明されてゐるとは必ずしもいへないにせよ、しかし一般に科學の本質に鑑み、この見解には窮極的に冒すべからざるものがあることは認められなければならない。したがつて第一次歐洲大戰後の世界が當面した重要な經濟問題の解決が、いづれも具體的特殊研究によつてのみ可能であつたといふ經驗に徴して、不評を蒙りはじめたところの純粹理論が、自己存続の理由を辨明すべく努めたのはまさに一つの必要であつたといふことも認められなければならない。さらに純粹理論が動態論的方向に自己發展を遂げるにあつて、あらためて均衡理論の手段性の一面が強調されると同時に、經濟の意味關聯にたいする根本的な理解の動機もまたこの側面から分離されるにいたつたといふことは、さらに大きな一つの喪失を意味するのであるが、しかしこの喪失もまた純粹理論の必然的發展過程であると解すべきであらう。^(註)個人の行動の合理的動機（いはゆる最大満足の達成）との結合によつて、經濟における意味關聯の論理を内包する純粹理論は、微弱ながら經濟の主體性にかゝる理解を伴ふものであつたのであるが、動態論的發展の契機においてはこのやうな理解の動機は打ちすてられねばならず、したがつて主體性の側面はこゝに全く喪失される結果となるのである。けだし理解もしくは意味關聯の問題はつねに主體または主體性との何らかのかゝはりを離れて在るべきものではない。純粹理論の以上の諸徴候はその必然的な方向を語るものと解されるのであり、なにかんづく最後の一つは全く

われわれの問題に背をむけたかの観がある。しかしこの正統的發展が新たな雑音を交へることなしに飽くまで一方的に繼續することは、われわれの一つの希望であり期待なのであつて、われわれがこれをいふのは精密科學としての純粹理論の性格にたいする最初からの承認を繰りかへすものであると同時に、かゝる純粹理論のあるがまゝの立場からは、こゝにいふ政治經濟學の體系問題といふやうな現代の問題にたいして、嚴密にいへば一定の意見や抗議は出ない筈のものであるといふことを一言するにある。意見があるとして、それは純粹理論が自己に課した本來の方法的限定を超えたところの、一層宏大なもしくは單に漠然たる意味での學問論的立場から出るものであり、したがつてわれわれは一群の純粹理論家から種々異なる答を同時に期待することができるといふべきであらう。しかるにわれわれは政治經濟學の體系問題を考へるに當つて、足場をまづ純粹經濟學そのものの内面に置かうとする。およそこの問題の最初の足場をどこに置くかといふことは、それ自體が一つの問題であるが、純粹理論はこの問題にたいしてすでに述べるごとく發言を放棄してゐるのである。たゞ言ひうるのは、それはもはや純粹理論の問題ではないといふこと、またそのやうな問題からの發展物はいかなる方向および内容をもつにしろ、これまでの純粹理論では決してないといふことである。これはしかしわれわれもいはんと欲するものにほかならぬ。純粹理論は數學者が『數學の一分科』を忘れてゐたのだといふワルラスの精神から生れ、これこそ人間を對象とする科學領域で發見された『唯一の精密體系』であるといふシュムペーターの精神によつて承けつがれたものである。そのやうな自己限定の反面には多くの興味ある問題の斷念と偉大なる謙虛があるのみで、もしその系統的立場からして現代の體系問題が論評されるならば、それは何よりも自己限定をみづからほどいたことを意味するであらう。われわれの問題にたいする論評は、これを要

するにすべて何らかの學問論的立場におけるものでなければならず、不幸にして純粹理論の側からの抗議といふこと
 きものが生ずるにしても、その本質は他の種々なる側の反對批評から特に區別される意味あひをもつものではないといふことを豫斷しておくのである。

そもそも政治經濟學建設の問題をば純粹經濟學の彼岸の問題とする從來の見解を一擲して、これを自己内面的な問題として取上げなければならないといふことは、そしてそれがたしかに可能であるといふことは、客體理論たる純粹理論もまたその根柢に微弱ながら經濟構造の論理をもつといふ事實にもとづく。しかしそのみではない。必要なのは主體と客體との統一理論であるが、純粹理論は體系の基底においてまさしくその原型をもつ。しかしそれは原型であり、原型にとゞまるのではあるが、しかし確實な形式において、つまり法則または原理の形式において、これをもつ。われわれが主體理論たる構成理論に心惹かれつゝ、しかも結局これをもつて最初の足場としないのは、研究經過における個人的な偶然によるところが多いにせよ、この意味の統一理論の原型がそこに見當らないためであると答へることが出来る。經濟構造の論理すなはち意味關聯の論理は、そのまゝで決して右にいふ統一の圖式を形成するものではない。經濟は主體のみに即するものでもなく、客體のみに即するものでもない。ゴットルにおける經濟と技術との基本關係は、經濟者と技術者との主體的な相互關係にとゞまるのであつて、經濟主體および技術主體におけるそれぞれの客體との統一理論はあたへられてゐない。いな、技術における統一理論としては費用原則があるとはいへ、技術原理の内面的形式性はあたへられてゐない。經濟における統一理論は原理の形式において見いだすことができません、いはんやその内面的形式性のごときは求めるべくもない。ゴットルにおいてはその本質理論の輝ける優位にもかゝらは

ず、主體と客體との統一理論は見いだすことができないのである。限界利用原理は經濟における主體と客體との統一理論の原型であり、いふまでもなく純粹經濟學の申し子であるが、純粹理論はしかしこれを産みおとすと同時に、その正體を永久に埋滅するやうな仕方でもつて、交換均衡の客體的形式に書き替へた。すなはち交換方程式であり、この轉形された形式こそは純粹理論の『精密的基礎』と呼ばれるものにほかならぬ。もちろん純粹理論の現代に於ける正系的な著作においても、この原理が最初明白に配分均衡の原理として把握され、しかるのちにその轉形を宣する例は、わが中山博士の名著『純粹經濟學』に見るところであり、またこの著作は注意ぶかく讀むものにとつては配分均衡の思想によつて整へられた一面も感得されるものであるが、しかしこの事例は純粹理論が限界利用均衡原理を一般に原型のまま展開することの不可能な體系であるといふわれわれの見解をくつがへすほどのものではない。この統一理論の原型を遠くゴッセンに見いだし、これに一種別な變形をあたへながら、そして均衡理論を排しながら、獨自の主觀的體系を築いたものにリーフマンがある。限界餘剩均等法則は一般に經濟行爲における配分と交換の二重性を、或は二つのディメンションを、表現するものと見ることができ、この意味においてリーフマンの體系はその根本的な主體的性格こそ注意に値するものであり、この國における最も有力なリーフマン祖述者たる宮田・福井の兩教授が、やがていづれもゴットルの體系に近づいていつた道ゆきは偶然でないことを知るべきであらう。われわれはこれを主體的理論への一つの動向と名づけることができる。ともあれリーフマンの限界餘剩均等法則は、その樹立者が純粹理論への一種の對立者であるにかゝらず、それ自體が均衡原理であるといふほど興味あるものはない。すでにいふごとく經濟行爲における二つのディメンションを無意識に内包する形態であるとはいへ、窮極的に主たるものが

交換のデイメンションであることは、それがかれの『餘剰』思想の原理たるにかへりみて明白であらう。われわれはまさに經濟行爲としての交換行爲一般、箇々の交換行爲の横斷的關聯を規定するものとしての配分行爲、またしたがつて經濟行爲一般における交換形式と配分形式との論理的關聯の問題を問はなければならない場合にのぞみつゝある。純粹理論の出發點は一つの假定である。この假定はすべての經濟行爲を交換行爲であると解するにはじまる。孤立經濟における生産もまた交換の圖式に入りうるのみではなく、あらゆる人間行爲が同一圖式に入りうるのである。一切の人間行爲が一つの狀態と他の狀態との交換として把握されるとすれば、經濟行爲を他の行爲から區別すべき限界もまた本來明確なものではない。一つの散歩を經濟行爲と考へるか否かは理論家の趣向の問題であるが、しかしこのことは可能であり、これらの事物に關しても『精密體系』が存在しうる筈であると、シュムペーターはいふ。經濟學の領域を限定するに際して重點を特に經濟行爲にではなく財貨數量におくのもこのためだといふ。われわれはいかなる場合にも事物に即した理論的思惟の透徹を讚美しないわけにゆかぬ。いはゆる經濟行爲のみならず、人間行爲の全體が精密理論すなはち均衡理論によつて體系化されうるだらうといふシュムペーターの即物的な想念は、經濟學の普通の題目を離れるのではあるが、一つの科學的題目を示唆するのである。それは人間行爲の全體のみならず人間存在の全體が配分關係の均衡理論によつて體系化されうるとするわれわれの思想と完全にしかも直接に照應する。配分理論の全體系が、その領域の内部にいかなる經濟學的領域を限定するかといふ問題は、シュムペーターの想念における交換理論の全體系が、その領域の内部にいかなる經濟學的領域を限定するかといふ問題と全く同意義である。この問題の決定はその本質上恣意的であるよりほかはない。政治經濟學建設の意圖において、われわれがこの領域を飛躍的

に擴大しようとするものであることは他の二三の方法論的試論に示したところである。人間行爲の全體を交換均衡の體系において把握することの興味は、一般にこれを配分均衡の體系において把握することの興味よりも遙に薄いやうにおもはれる。後者は人間行爲の全關聯のみならず人間存在の全關聯をも體系化しうるに反して、前者はこれを企圖するに適當な圖式ではない。(配分體系が人間の社會的存在の生活的全關聯を組織しうるといふことは、一つには經濟社會學の要求にも答へうることであるが、こゝにいふ經濟社會學とは純粹理論を中心としてその立場から考へられた『與件』の擔當者たるそれではない。純粹理論の外周を形成するそれではなくて、主要内容たる經濟諸量關係そのものを人間關係として裏がへす底のものである)。しかし當面の問題は交換均衡と配分均衡との理論上の評價ではなくて、理論的な交渉である。配分均衡は箇々の交換の背後をつらぬく連衡の原理であり、箇々の行爲の關聯性を語るのみならず、秩序としての經濟の全體性を語る。經濟主體、經濟客體、經濟的行爲および生活の情況といふ四つの基本要素に關する經濟學上の基本命題を一環的關聯において封鎖的に統一するのみならず、秩序としての經濟をそれらの相互關聯において一つの全體として形成するのである。この原理は、———としておそらくたゞこの原理のみが、今日まで考へられる範圍内では、經濟における主體と客體との統一原理であり、理論と政策との統一的體系を可能ならしめる原型でもある。思惟形式としては今日までの純粹理論の通常の理論的思惟の軌道から脱け出してはゐるが、しかしそれ自體決して思辨的・形而上學的ではなく、交換方程式とその一つ手前に伏在的に擴がつてゐる一切の世界領域とを科學的に正當に接合せしめるところの唯一の即物的形式である。それは依然として事物に即した思惟であり、交換關係が理論上の一箇の假定であるといふのとおなじ意味では假定であるが、事物そのものの認識に繋がることに

においては交換關係のそれと優劣を問はるべきものでもない。それは明かに純粹理論内部の二つの均衡思想の一つである。行爲としての經濟は箇々の交換においてではなく、それに先だつ豫算計畫として、もしくは箇々の行爲をつらぬいて働くその場の判断および選擇の連鎖として、見いだされる。それは一經濟期間における主體の行爲の總和だといふよりも、箇々の行爲をして然かあらしめる秩序性そのものであり、『箇々の行爲の底の一つの行爲』だといふことができる。こゝでは無制限な分析的操作はその場所ではない。われわれはむしろ純粹理論が交換方程式以前の序說的敘述において、一般に『選擇』といふ行爲をもつて經濟の本質であると説いてゐる事實をたゞちに取りあげなければならぬ。それは箇々の經濟主體がそれぞれ自己の處理圏内の一定財量について行ふところの經濟活動の總體は、生産であれ消費であれ、簡潔にこれを『選擇』といふ用語で包括的に表現しようとするものである。すなはち交換關係は配分關係の一表現であるとするわれわれの見解にむしろ反して、純粹理論の通例の考へ方は交換關係をもつて選擇行爲の一表現だといふのである。しからばわれわれは交換形態の本質としての配分と選擇とがそもそも互にかなる論理的關係にあるかを究めなければならぬ順序となる。しかしこの問題は配分原理と選擇原理との一般關係としてすでに十年前に一度解明を試みたことがある。¹³⁾ 残されてゐるのはむしろ選擇といふ行爲の種々なる意味は何であるかといふ問題であり、あるひはこの問題からの再出發である。

たゞちに思ひ到るやうに、選擇は經濟活動にのみ固有のものではなく、『ニコマコス倫理學』においてはそれはすでにアリストテレスの問題の一つでもあつた。しかるに經濟活動における選擇行爲もまた安易なる概括をゆるすものではない。第一に消費者における消費配分の選擇、第二に生産資力所有者における生産配分の部門選擇、そして最後

に第三に生産者における一定生産のための生産資材結合の選擇である。なほこれらの選擇は、主體の範疇を異にするごとに、おのおの意味内容を異にするのみならず、つねに種類の選擇と數量の選擇とを併せて意味することをも忘れてはならぬ。およそゴットルにおける經濟構造の論理が一旦受け入れられたわれわれの領域では、主體の範疇は確立されなければならず、主體の範疇にして一定の意味關聯を要求するかぎり、選擇行爲のそれぞれの意味もまた主體の論理から生れなければならぬ。すなはち第一および第二の選擇は、一つは個人生活的な意味における、他の一つは社會經濟的な意味における、經濟配分上の選擇であり、そして第三の選擇は生産技術上の選擇である。技術と經濟とのこれらすべての意味内容、意味の相異、および意味の關聯は、全體の選擇行爲を一つの相關的にして階層的な關係に織込まねばやまぬであらう。われわれはこの見解に立たねばならぬ。これこそは主體構成の分析において得られた意味關聯の新たな論理をもつて、財量關係全般を貫徹するところの政治經濟學的方法である。それは純粹理論の必然的發展方向を妨げることなしに、内面的にはそれと照らしあはされつゝ、しかも窮極的には統制經濟論のみならず計畫經濟學の方法をまで規定しなければならぬであらう。なぜといつてわれわれの見解によれば、計畫經濟學は何よりもまづ政治經濟學でなければならず、それは決して價格理論の機能論的な書改めに終始するものではないからである。第一次歐洲大戰以後の社會主義批評に一期を劃する經濟計算論争が最近におよんで技術と經濟との區別を強調し、殊に一方ランゲのごとき建設的理論では資力配分の學說をもつて改めてその脊柱となすにいたつた情況は、われわれのかゝる見解を裏づけるに足るであらう。しかしそれにしてもそれらはまづ全體として方法技術的な領域を超えたものではなく、ピグーの名著『社會主義對資本主義』を形づくるところの政治經濟學的性格に及ぶものではない。¹⁴⁾

われわれは最後の結論に近づきつゝある。シユムベーター自身にも技術と經濟との對照的な概念規定はある。しかしそれはわれわれの問題となんらの關係ある問題を含んだものでもない。あらゆる種類の經濟主體はその種類を問ふことなく一箇の選擇者として規定され、選擇の意味内容はたゞ一般に諸財獲得の限界點における相互依存すなはち内面的な均衡である。限界利用均等と限界收穫均等は同一面において捨棄され、すべての經濟主體は高度に抽象された均衡主體である。そして全國民經濟の均衡原理はかゝる箇體の均衡原理の相互作用の結果であるとなる。それらはすべてそれでよい。なぜといつて問題を交換均衡の問題に限定し、經濟諸量の運動法則を把握するためには、このやうな前提で十分であり、——いな、このやうな抽象的前提こそ必要だからである。事物の社會的・客體的な論理すなはち交換諸量の運動は經濟における意味關聯の論理にしたがふものでもなく、またその論理を表現するものでもないといふ事實は實にこれを動かすことができぬ。それはあたかも産業體系の總體的分岐現象が欲望體系と技術體系との交錯であり、これを一方的に考へることはいづれも大いなる抽象であるといふわれわれの結論、すなはちアダム・スミス分業論の再吟味におけるわれわれの結論に照應するものである。¹⁶この照應は體系問題の確立のために重要な基礎であり、またこの事實認識のみがわれわれの體系問題におけるあらゆる思辨的空理への逸脱を救ふであらう。われわれのいふ意味關聯の論理はつねに主體的な立場の論理であり、したがつてまさしく政治原理的な論理であり、このやうな經濟諸量の盲目的な運動をその脚下から照明しつゝ、それらの運動の一切の意味を目的合理性の立場において内面的に理解するものでなければならぬが、この立場はいふまでもなく一般に經濟諸量關係を動かすところの立場、窮竟的にはみづから一箇の經濟者たる國家の立場である。¹⁶一箇の政治經濟學として考へらるべき計畫經濟學の構想にお

ても、おそらくその體系的骨格をなすものはかゝる意味での政治原理としての配分原理以外にはないであらう。配分原理が一方において經濟の客體的側面に接し、他方において生活の世界觀的側面に繋がつてゐるといふ一般關係を論證することは小論の順序として當然の歸結であるが、しかしこれらの問題は他の機會に論じられたのであるし、いはゆる經濟本則または經濟三則の命法の中から、嚴密な意味での經濟原理として、固有の內面的形式と内容を帯びつつ配分原理が生成した歴史的事情もまた他の機會に述べたことであるから、本質理論そのものとしては主要内容をなすべきこれらの問題には深く觸れずともゆるされるであらう。こゝでは主として交換均衡と配分均衡との理論的な交渉に關する若干の考察を主題としたにとゞまる。それは配分關係こそ交換關係の本質的側面であるとする古くからのわれわれの見解の、またも臆面なき縷説であつて、本質的に新しいものは何もない。兩者の交渉に關する分析もみづから徹底したとはいへないのであるが、しかし小論の全體としての釣合を破壊するやうな部分的穿入はわざと避けたいのである。われわれはなほ一言する。純粹理論の體系がすでに見るとききものである以外に、主として生産係數の概念と結ばれた『結合』の原理（これは一つの思惟形式である）によつてそれは組織されつゝあり、しかも他方において生活經濟の欲望を基礎とする均衡原理は奇妙にも『配分』によつて説かれつゝあり、そしてこの二つの思惟形式の相互不消化状態はマーシャルからシュムペーターにいたるまで體系問題として反省されず、兩者の論理的關聯は説明されてゐないといふのは一體何を意味するのであるか？ この問題提起に夙に答へて配合（結合）と配分とは同一事物の兩面なりとした人に赤松教授がある。教授はたしかに一つの答を遺したものであらう。生活經濟もまた生活目的の一義的に設定するならば、一つの目的達成のための資材調達およびその合理的結合であり、一箇の工場技師が一定の

生産目的のために行ふ資材結合の論理と異なるところはないからである。われわれはこの思惟形式を一面において尊重しなければならぬ。しかるにわれわれの主要問題は政治經濟學建設の意圖における理論と政策との統一原理の問題であり、そして主體的な意味關聯の論理にしたがふ財量關係分析の方法問題である。それはいかにして純粹理論の基礎に世界觀の構造を導き入れることができるかといふ問題とおなじである。われわれにしてこの問題を問題とするかぎり、かりに用語の異同はどうあるにせよ、生産能率の工場技師的課題と人間生活における資力配分または資力「結合」の課題とを同視することはできないのである。もちろんかゝる體系問題が、きはめて危険な、見透しの疑はしい問題であるといふことは、繰返してわれわれのいはんとするところであつて、小論が双渡りの危険を冒しつゝあることは自覺してゐるのである。しかしわれわれはなほつぎのやうにいふ權利は保留せざるをえない。——すなはちわが學界の眞面目な著作にして、なほ儀禮的な意味を遠く超えざる引照や引用が隨所に行はれ、その結果、著作の本體と矛盾する諸學説が屢々綜合的攝取の表面形式において傍證的地位を附與されてゐるといふ現狀においては、それらの安易なる協調形式が學問的になんらの効果をも生ずるものでないといふ主張である。小論はおそらく淺見と獨斷にみたされてゐるであらう。しかしなほ推論の全體において右の情況にたいする一つの否定的意義が認められるならば満足しなければならぬ。學問的偏見と固陋とを敵とし、あらゆる學説の個別的硬化を警戒しつゝあるわれわれの求めるものは、學問研究における自由濶達の新精神であり、われわれの信ずるところではこの精神のみがわれわれをしてあらゆる事物の内奥に潛らしめ、そしてあらゆる事物の内奥から脱却することをえせしめるのである。

(1) 木村健康・安井琢磨共譯、シユムペーター『理論經濟學の本質と主要內容』(J. Schumpeter: Das Wesen und der

Hauptinhalt der Theoretischen Nationalökonomie, 1908.)

- (2) ここに『全體の印象として』といふのは相對的な意味である。中山博士をワルラス、シュムペーターから分つもの一つはやはり精密的態度の緩和であるといふことができる。
- (3) 宮田喜代藏著『生活經濟學研究』(昭和十三年)はその一例であり、福井孝治著『經濟と社會』(昭和十四年)はもう一つの例である。
- (4) 金子弘譯、ウイスマケイン・リットケ共編『獨逸經濟學の道』(E. Wiskenann, H. Lütke: Der Weg der deutschen Volkswirtschaftslehre, 1937)の構成はゴットルを歴史的に地位づけるものである。
- (5) 武村忠雄著『統制經濟と景氣變動』(昭和十三年)は純粹經濟學にたいして政治經濟學の名稱をみづから唱へるものである。しからは赤松要著『産業統制論』(昭和十二年)もまた同時に顧られなければならないであらう。
- (6) 杉本榮一著『理論經濟學の基本問題』(昭和十四年)序文並に特に第四論文を見よ。
- (7) 今日の國民經濟學的諸傾向のうち、學問的な最も自覺の高いものとして獨逸歴史學派に關する研究を擧げることができる。それはゴットル研究をゴットルから始めるのでなくて、いはゞリストから始める人々のことである。高島善哉・板垣與一の兩氏を擧げなければならぬ。後者における體系建設の意圖は特に顯著であるやうにおもはれる。
- (8) 拙稿『國家と經濟の論理』(中央公論五四ノ四)。
- (9) 宮田喜代藏著前掲書、並に同氏著『經營原理』(昭和六年)について見よ。なほ中山博士著『經濟學の一般理論』(新經濟學全集第一卷、昭和十四年)第一篇第六章第三節におけるゴットル引用の意義は疑はしい。その理由は小論全體が説明する。レーデラー (E. Lederer: Grundzüge der Oekonomischen Theorie, 1922) もまたゴットルにおける技術と經濟の範疇を残さず肯定したが、しかし後の敘述はその肯定と矛盾してゐる。
- (10) 勝本鼎一譯、左右田喜一郎著『經濟法則の論理的性質』(大正十二年)はわれわれの問題にとつて空虚である。その一門下

本質理論と純粹理論

一 橋論叢 第四卷 第五號

の一著作の方がまだよい。南亮三郎著『經濟學の基礎的諸問題』(昭和三年)の第一篇が經濟本則に関する文献涉獵に努めてゐるのは興味がある。しかしその結論はこの問題に何ものをも加へない。いはゆる經濟哲學時代の所産だからである。

- (11) 中山伊知郎著『純粹經濟學』(昭和八年)第一章第三節。
- (12) 同書 第二章第三節及び第三章第三節等。
- (13) 拙著『配分理論』(經濟學全集第六卷所收、昭和五年)第二章第九節及第一〇節。
- (14) 拙稿『計畫經濟と世界觀の問題』(據定——改造二一ノ一二)。
- (15) 拙著『經濟本質論』(昭和十二年)第三章。
- (16) 拙著『マルクスのロビンソン物語』(昭和四年)第一章。
- (17) 赤松要『經濟生活の綜合的把握への管見』(國民經濟雜誌五五ノ二)。